

談話における接続詞「で」の用法

— 女性話者の談話を対象として —

山 本 貴 昭

0. はじめに

接続詞については、国語学や言語学の分野において、古くから精緻な研究が行なわれている。しかし、研究の対象は「そして」「しかし」などのような、書き言葉の色合いが強いものが扱われることが多く、「で」に代表されるような、話し言葉の色合いが強い接続詞についての研究はいまだ不十分である。では、日常の談話で用いられている接続詞は、希なもので研究の対象とならないものなのであろうか。

- A : | …印刷しようと思ったんだけど、印刷の紙は切れているし、買いに行くにもお金が無くって一、で、どうしようもなかったの。
- B : | で、どうなったの？

このような談話は日常的によく耳にするものであろう。このように、日常会話において使用されることの多い接続詞の「で」であるが、その使用実態に着目した研究は少ない。本論文では、女性の談話から収集した実例を資料として接続詞「で」の分析を行ない、その用法の全体的な様相を明らかにすることを目指した。

1. 先行研究

接続詞に関する研究では、従来は文法体系における接続詞の位置付けを問題にすることが多かった^(注1)。また、その用法を考える際には、接続詞を含む文とその直前の文の二文が想定され、それを超える視野で接続詞を捉えることは少なかったように思われる。近年になり、研究の目的も文法上の位置付けに加えて接続詞個別の用法へと広がりを見せ、その分析の方法も二文という限定した範囲から複数の文、さらに話し手と聞き手とが想定される談話の範囲にまで拡大されるようになった。さらに、その観点も、従来のように、

文と文との論理的関係のみを扱うのではなく、日本語教育における言語習得や談話を管理する談話接続詞へと広がりを見せている。しかし、それらの研究においては「しかし」「それで」などといった伝統的な接続詞が扱われることが多く、「で」のような口語的な接続詞は既存の接続詞の異形として簡潔に扱われ、分析の対象として本格的に取り上げられる事は少なかったように思われる。

「で」が、接続詞の分類上どこに位置するのかについて触れた研究は田中（1984）などに見られるけれども、その具体的な機能に目を向けたものは少ない。大石（1954）は、日常談話を対象とした接続詞研究の中で「で」を扱い、「で」の機能の多様性を指摘した。しかし、本文中の「ほとんど遊び言葉に近い」という指摘に見られるように、その機能分類には問題が残る。有賀（1993）では、接続詞「それで」を扱う際に、その異形として「そいで」「そんで」などと並ぶ形で「で」を取り上げ、分析を行なっている。その結果、7つの用法を明らかにしている。この研究では従来のような接続詞の文法体系上の位置付けから離れ、個別の接続詞として「それで」に目を向けた研究が行なわれている。更に、検証方法も従来のような研究者の内省という手段ではなく、実例をもとにした、より客観性の高い方法によって行なわれている。また、研究の視点も従来の連文から話し手と聞き手とを想定した対話へと移り、新しい視点が取り入れられている。しかし、問題点も残されている。第一に、「で」と「それで」とがまったく同じものとして分析されている点である。確かに「で」が「それで」の異形である可能性は高いが、慎重な調査無しに全く同一の機能を持つものとして設定したことには疑問が残る。第二に、用例の採取が漫画や小説などの書かれたテキスト、または教材用に作成された映像資料を対象として行なわれていることである。対象としたこれらの資料は、いずれも作者が熟考して作り出した結果のものであり、その場で行なわれる一回性の強い日常的な談話とは性質が異なる。「で」が口語的な接続詞であると言われる以上、実際の話し言葉を対象とした分析が必要であろう^(註2)。

「で」の原型とされる「それで」の用法に関しては、対話という形をより強調して「それで」を分析した金（2000）や、アンケートを用いて量的な分析をおこなった塩澤（1997）、「それで」と類似した用法を持つ接続詞を取り上げ、その機能上の差異を検証したひげ（1986）（1987）などを挙げるができる。いずれも「それで」を個別の接続詞として分析して大きな成果を上げている。しかし、依然として談話資料は本やテレビの対談からのものであり、自然談話から離れているという点で、先程述べた問題点は解決されているとはいえない。また、そこでは「で」については全く触れられていない。

以上の先行研究を踏まえ、本論文では次の2点を明らかにすることを目的として設定する。

1. 口語的な接続詞「で」の用法
2. 「で」と「それで」との異同

この2点を、自然談話を中心にして検討する。

2. 調査概要

本論文では、自然談話を収集し、それを分析する方法をとる。今回分析の対象とする資料はA～Eの5つの談話資料である。それぞれの資料について、以下に簡単に示しておく(註3)。

談話資料	採取日時	参加者	場 所	録音時間
A	2002年11月9日	a・b	広島市内のレストラン	約18分
B	2002年11月10日	a・c	広島市内のレストラン	約21分
C	2002年11月13日	a・d	広島市内のレストラン	約19分
D	2003年1月3日	a・b	広島市内の喫茶店	約24分
E	2003年2月16日	a・d	広島市内の喫茶店	約45分

・談話参加者のプロフィール

- a 近畿地方出身、広島在住の30代女性。現在団体職員をしている。a、b、c、dはグループでよく遊びに行く友人同士の関係である。今回はそれぞれ一人ずつと会い、食事をしながら近況を語り合った。
- b 広島県出身在住の30代女性。aとは学生の時に知り合い、それ以来の友人である。現在会社員をしている。aとは一月に一度会っている。
- c 広島県出身在住の30代女性。aとは学生の時に知り合い、それ以来の友人である。現在会社員をしている。aとは数ヶ月に一度会っている。
- d 広島県出身在住の30代女性。aとは学生の時に知り合い、それ以来の友人である。現在会社員をしている。aとは数ヶ月に一度会っている。

いずれの談話資料も、広島市内の繁華街で採取した。録音に際して今回の採取の目的が「で」にあることなどは教示者には伝えていない。

この音声資料を文字化して談話資料とした。この談話資料中、接続詞「で」の使用が合計223回認められた。

3. 「で」の用法

まず、接続詞「で」を談話資料から抽出し、その用法を明らかにする。

先行研究においては、「で」のみの用法に着目したものは見当たらない。そこで、「で」が「それで」の異形であり、同じ用法を持っていると仮定する。個別の接続詞として「それで」を扱った有賀(1993)、金(2000)などを参考にすると、「で」は順接の「のべたて型」「認め型」、添加の「のべたて型」「展開要求型」「話題展開型」「既出文脈言及型」「依

頼切り出し型]、「逆説」の合計8つの用法があると予測できる(注4)。

表1 接続詞「それで」の用法一覧

用法	例文	前件と後件との関係
順接	のべたて型 「手持ちのお金がなかった。 <u>それで</u> 、その本を買うことができなかった。」	前件を条件、後件をその帰結として結びつける。
	認め型 「実は昨日は家にいなかったんだ。」 「 <u>それで</u> 、電話をかけても繋がらなかったのか。」	
添加	のべたて型 「昨日買い物に行って、 <u>それで</u> 、服を買って、 <u>それで</u> 、喫茶店に入って…」	前件を前提として後件で話が進められる。
	展開要求型 「…暗くなって、そこで困ったの。」 「 <u>それで</u> 、どうしたの?」	前件に続く発話内容の展開を後件で求める。
	話題展開型 (学会の様子を報告する文脈で) 「第一会場はこんな感じだった。 <u>それで</u> 第二会場は…」	前件に関連する話題を、後件において新しく切り出す。
	既出文脈言及型 (予め用件を伝えた人の所へ行き、) 「 <u>それで</u> 、例の話ですが…」	談話参加者に共通する文脈を前件とし、後件で続ける。
	依頼切り出し型 「明日、式にいけるよ。」 「ありがとう、 <u>それで</u> 、お願いがあるんだけど…」	前件を前提として、後件で依頼を切り出す。
逆説	「昨日は朝から晩まで働いた。 <u>それで</u> 、なんともなかった」	前件と後件とを逆説的な関係で結ぶ

これらを「で」の用法として仮定し、先の談話資料から採取された「で」の発話を、それぞれの用法に当てはめ、接続詞「で」の全体像をつかむことを目指した。

その結果、「で」は「それで」の用法に収まる形で用いられており、両者が非常に類似していることが分かった。ただし、「それで」の用法の中には「で」には認めることのできない用法がある。また「で」の用法においても、それぞれに用いられる頻度の差もあり、「で」が単純に「それで」と同じものとはいえない。以下、個別の用法について検討する(注5)。

3-1 順接・のべたて型

「順接・のべたて型」は、因果関係を持った前件と後件とを、前件を条件、後件をその帰結として結びつける用法である。

【事例1：bが胃潰瘍になった話】

bが経験した胃潰瘍の話をしている。胃潰瘍の事実は聞き手であるaも大まかには知っているが、詳しく聞くのは今回が初めてである。

- 1.1b : 食べた後にー／【a : うん】痒くなって搔いたらー／【a : うん】こー搔いた
 ー跡がねー／【a : うん】すじきりのーなんか／ジマシシ？<みたいなの
 ができる>／
- 1.2a : ほー／
- 1.3b : すりむかれたよーに<跡ができて>／【a : うん】『おーっ』と思ってきても
 ー／【a : うん】もー一時間ぐらいたったら<その跡が>消えるんよー／
 【a : うーん】
- 1.4b** : でー／『なーんかおかしー／【a : うん】な』とは思って【a : うん】たんじ
 ゃけどー【a : うん】／

(談話資料D)

これは後に触れる「添加・のべたて型」に類似しているが、「で」の前件と後件との関係がより明確である。1.3の「跡が一時間位経ったらすぐ消える」という前件に対して、後件はそれを受ける形の結論として、1.4で「おかしいと思った」という発話を行なっている。そして、両者は「で」で結び付けられている。この場合の両者は、「搔いた跡がすぐ消える」<だから>「何かおかしいと思った」というように他の順接の接続詞と置き換えが可能である。後件は前件を根拠として、その結果として発話される。これが「順接・のべたて型」である。この用法は、今回の談話資料では、ある一連の出来事を説明している文脈で用いられることが多かった。

3-2 認め型

「認め型」は、既知の情報である後件に対して、前件の情報と因果関係が成立することにより、いわば理由の後付が行なわれる用法である。しかし、今回の談話資料においては、認め型の順接は観察されなかった。

3-3 添加・のべたて型

「添加・のべたて型」は、前件と後件との因果関係がなく、前件を前提として、後件で話を進める用法である。今回の調査で得られた「で」のうち、最も多く認められたのがこの用法である。

【事例2 : aが捻挫をした話】

aが数週間前に負った捻挫の話をしている。数分前からこの話題が続いており、aが主に発話をして話題を展開している。bは相槌を打ったり、時折話題について聞き返したりしている。

- 2.1 a : えーと<その日>郵便ーを取りに出よーと<して>/【b : うん】
- 2.2 a : でこー<下駄が>あるじゃん? /【b : うん】
- 2.3 a : でそれ<=下駄>をー /【まず/左足で踏んでー /【b : うん】右足をこー<下駄に>入れよー】と思って/左足で踏んだらー /【b : うん】多分/鼻緒でーか何かでこー滑ったんだと思うよ/ツルっとなってー /【b : うん【笑い】】
- 2.4 a : 何で滑ったか分からないのよ<下駄を>踏んだら何かカクっといってーもー /
(談話資料A)

ここでは接続詞「で」が2箇所において見られる。この「で」はいずれも同じ「添加・のべたて型」である。まず2.2において「で」が用いられる。この「で」の前件は、直前の2.1の「郵便を取りに出ようとして」という、当日のaの行動に言及している発話である。後件は、事件の現場となった玄関の状況設定である。「で」の前件に添加する形で、当日の出来事について情報を付け加え、話題を展開していることが分かる。次の2.3の「で」も同様である。前件までの発話においてなされた玄関の状況説明を踏まえ、そこで起こった具体的な事件について、後件で情報を添加して、話題を展開している。この用法は【事例2】のように、一人の発話者が連続して発話を行い、自分の体験などを時系列に沿って語る際に多く現れる。そのため、集中して現れることが多いようである。

3-4 展開要求型

「展開要求型」は、情報を要求する発話に先行し、相手の発話内容の展開を求める用法である。

【事例3：ラーメンの値段についての話】

a が博多に旅行に行った話をしていいる際、旅行に同行しなかったdが博多のラーメン店の話についてaに尋ね、それについてaが話を始めた。その話題は終盤に近づき、当日自分が経験したことの説明から、味や量の話へへと移っている時の談話である。

- 3.1 a : bもー / bは<ラーメンを>一玉替え玉したけどー /【まー若い頃はー玉替え玉でも余裕だったけどこれからはもーちょっと少なめでーかも半玉でもいいかも】とかってゆっとたけど /
- 3.2 d : へー半玉ー =
- 3.3 a : =うん /
- 3.4 d : へー /すごい /
- 3.5 d : でいくらなん /

3.6 a : | えーっとねー／650円

(談話資料E)

この事例3では、3.5において「で」が用いられている。ここでは、3.4まで続いていたラーメンの量に関する話題を前件とする。これを受けて、次の「いくらなん」という後件で値段についての情報をaに要求する。それに従い、3.6において、aは値段に関する話題の展開を始める。これが「展開要求型」の「で」である。前件は相手の発話や話題であることが多く、「で」の用法の中でも、より対話的な性格の強いものと言える。

3-5 話題展開型

「話題展開型」は、新しい話題を切り出す用法である。ただし、この新しい話題は完全に別の話題ではなく、それまでのものと関連しているものである。その点で、「さて」「ところで」などの、いわゆる転換の接続詞とは異なる。また、同一話者が行なうという点で、「で」の用法の中で、同じく話題を変える「展開要求型」と異なる。

【事例4：dがかつてプールへ行こうとした話】

aがプールに行って運動を始めたという話がこの直前まで続いている。それを聞いて、dも過去に同様のことを行なった経験があると話し始める。

4.1 d : | あたしも一回くプールへ泳ぎに>【行こっかなー】と思って／【a：うん】<水着を>出しとったんよ＝

4.2 a : | ＝あほんと＝

4.3 d : | ＝水着まではく出してた>【a：うんうんうん】／

4.4 d : | じゃけどー／そっからがくプールに>いかんかった【a：うん】／
(3, 0)

4.5 d : | でねー／【a：うん】うちの妹にもね／【a：うん】<通勤を>【歩いていけばいーじゃん】とかー言われて>／【a：うん】

4.6 d : | で／あのー／【a：んー】通勤を？／【a：うん】<家の>近くまでー／【a：うん】アストラムライン<の駅>までー／あの自転車か何かでく行こうと思って>＝

4.7 a : | ＝一時はやりよったよねー

4.8 d : | そーそーそーそー |笑い|

(談話資料C)

この4.5に見られる「で」が「話題展開型」の用法に当たる。「で」の直前にある、「プ

ールに行かなかった」という4.4の発話で前の話題が終了し、「で」に続く「妹に通勤を歩けといわれた」から新しい話題に移っている。また、「で」の直前に数秒にわたってポーズが挿入されていることから、「で」の前で話題が一旦終了し、話題が転換していると考えられる。ただし、これは完全な転換ではなく、「運動しようとした経験」ともいうべき高次のテーマでこれらは共通している。

3-6 既出文脈言及型

「既出文脈言及型」は、談話参加者に共有されている、過去の情報を指し示すことによって、その情報を再び扱うものである^(注6)。

【事例5：aが旅行に行くことになった話】

aが京都に旅行に行った話題が続いている。その中で、その旅行に行くことになった契機についてdに話している。当日のeとの談話の場面を再現しながら説明している。eはaとd両方に共通する知人である。

- 5.1 a : < eが電話相手に>【<11月の>3日4日で<京都に>行くん?】とか<言>つたらー/<その電話相手が>【あーでも4日が駄目なんよーあたい今回やめとくー】って最初ゆっちゃったみたいなんじゃけど【d:うん】eが【電話しよって】
- 5.2 d : [eが?]
<電話してたの?>=
- 5.3 a : =うんそーそー/
- 5.4 a : でー/eが【でも/レンブラント<の展覧会に>行くんじゃけど】/【d:うん】<と言ったら、電話の相手が急に意見を变えて>【ちょっと待ってー/日帰りでも<参加>オッケー?】【d:うん |笑|】とかいーだしたらしーんよ |笑い|

(談話資料C)

事例5では、「で」を5.3と5.4との前後2発話の範囲で見ると、話題が転換しているように思える。これは従来の接続詞研究で言う「転換」に当たるであろう。しかし、ここで視点を複数の発話のレベルにまで拡大すると別の解釈が可能である。「で」発話の前には5.2と5.3(網掛け部)において「質問」とそれに対する「回答」という隣接ペアが作り出されている。この隣接ペアは、5.1のaの発話に割り込む形で開始していることから分かるように、それまでの話題に挿入される形でなされている。別の話題が割り込むことによって、5.1まで続いていたそれまでの話題は一旦中断される。5.2と5.3では、「電話をかけ

ていたのは誰かと」いう点に話の焦点が移動し、5.1まで続いていた話題の流れは変更される。しかし、5.4において、「で」によって5.1の発話とその話題が指し示される。そのことにより、話題が元に戻っている。いわば「飛び石型」に展開しているのである（注7）。この用法では前件が「で」の発話の近辺である場合もあるが、かなり前方の発話に前件が存在することもある（注8）。前件と後件との距離は様々であり、少し前の話題に戻したり、その談話とは別のテキストから話題を取り上げたりすることもある。

3-7 依頼切り出し型

「依頼切り出し型」は、「で」の後件に行為を要求する文が接続する用法である。

【事例6：aが勧めた本に関する話】

aがマンガを持ってきて、「この本を読んでみて」とcに勧める。cはその本を読んで、キャラクターが可愛いとその本を褒める。cが本を読みつつその度に感想をいい、aは時折ページを指定してその部分を読むことを勧める。

6.1 c : <マンガのキャラクターが着ている服が>強烈なアニマル<柄でかわいい>/

6.2 c : <このマンガのキャラクターが>かawaiiーよー/

6.3 c : これかawaiiーねー/【a : {笑い}】

6.4 c : あー<この本>絶対見る/見る/

6.5 c : でちよっとしばらく借りといて [いーわけー?]

6.6 a : [あもー/うん] どーぞ/

(談話資料B)

後件にあたる6.5の発話が、直接的な依頼の発話でなく疑問の形をとっているが、間接的な形で聞き手のaにマンガを貸してくれることを依頼している。それに対する発話が「どーぞ」と、相手に本を貸すことを許可したものであることから、この後件が依頼であったことが分かる。この「で」が「依頼切り出し型」である。

3-8 逆説

「逆説」は金（2000）において新たに提案された、接続詞「それで」の用法である。この用法では前件と後件とは逆説的な関係で結ばれる。

【事例7：韓国行きのフェリーができた話】

dが行った韓国旅行の話に続く形で、韓国へ行くのにどのような交通手段があるかという話になる。その中で、aが韓国行きのフェリーがあることをdに教える。

- 7.1 a : それ<=フェリー>がねー/去年就航したんかな?/
 7.2 d : そー=
 7.3 a : =うん/でなんか客足伸びてないらしいのよ=
 7.4 a : =早く行かんとー [笑い] / [釜山便くのフェリー>が] <無くなる>
 7.5 d : [もー] 駄目じゃ [笑い] /

(談話資料E)

「で」が指し示す前件は「フェリーが去年就航した」、後件は「客足が伸びてない」である。この2つの関係は、「就航した」<けれども>「客足が伸びない」という逆接の関係で捉えられる。ただし、この用法は単純な逆説ではなく、「けれどもあなたの意見には反対です」といった場合の他の逆接の接続詞と単純に置き換えることはできない。この用法は、「添加・のべたて型」と同じように、ある出来事を連続的に説明する際に用いられている。

3-9 「で」の用法のまとめ

さて、以上「で」の用法について、実際の使用例を検証する形で考察してきた。「で」は「それで」の用法とほぼ一致しており、非常に類似している。しかし、「で」は「それで」の用法全てに対応するのではなく、論理的な関係を示す順接よりも、前件に情報を付け足して、話題の展開を行なう添加の用法の方が多く認められる。その中でも「添加・のべたて型」や「既出文脈言及型」が用いられることが多い。また、「それで」では用いられる「認め型」が、「で」の用例には認められなかった。

今回の調査からの結論としては、「で」は「それで」のもつ用法と重なりが多く、「それで」の異形である事は間違いない。ただし、添加に用いられることが多く、「それで」の用法のうち、「認め型」を除く、「順接・のべたて型」「添加・のべたて型」「展開要求型」「話題展開型」「既出文脈言及型」「依頼切り出し型」「逆説」の7つの用法を持つ接続詞である。

なお、残る「不明」の12例では、「で」の前後で聞き取れない部分があったり、途中で談話が遮られたりした為に、用法を決定することができなかった。

表2 接続詞「で」の用法

用 法		用例数
順 接	のべたて型	20
	認 め 型	0
添 加	のべたて型	142
	展 開 要 求 型	2
	話 題 展 開 型	9
	既 出 文 脈 言 及 型	35
	依 頼 切 り 出 し 型	1
逆 説		2
不 明		12

4. 「で」と「それで」との比較

接続詞「で」について、どのような用法で用いられているのかを見てきた。全体的には先行研究で述べられている通り、「で」の用法は「それで」の用法と重なり合う部分が多く、「で」と「それで」との間に類似的な関係がある。ただし、「それで」と「で」とは完全に一致するものではない。その差をより明確にするために、「で」と「それで」とを比較する。

まず、今回の談話資料における量的な差である。今回扱った談話資料において、接続詞「それで」がどの程度用いられているかを調査した。その結果、14の発話において、「それで」が用いられていた。これは、先の接続詞「で」の総数と比較すると少数である。マンガや小説などの書かれたテキストやテレビの対談番組といった改まった場面などにおいては、「それで」が多く用いられているようであるが、日常の友人同士の談話などでは、「それで」よりもむしろ「で」の方が主流であると考えられる。

次に、具体的な用法上の差異である。今回の談話資料中での「それで」の用法を以下にあらわす。

順接・のべたて型…2 認め型…1 添加・のべたて型…4 展開要求型…1
話題展開型…0 既出文脈言及型…5 依頼切り出し型…0 逆説…0
不明…1

「それで」の総数が非常に少ないために、これが「それで」の用法全てであるとは言えないけれども、この中に注目すべき点がある。それは、「で」では認められなかった用法が、「それで」では用いられているということである。1例と少ないながらも、「それで」では「認め型」が用いられている。

【事例8：bが胃潰瘍になった話】

【背景と文脈は【事例1】とほぼ同じである。】

8.1b： (省略) …インターネットとかで<病名を>調べよったらー／【a：うん】十二指腸炎の？／【a：うん】あなんか症状とかゆーてから／【a：ふんふんふん】でー／みぞおちが痛いじゃのー／【a：うん】食べたら治るってゆーのもあってー／【a：うん】<自分の症状が>食べたら治るけー見てみたらー／【a：うん】十二指腸潰瘍の特徴である () <って書いてあるから>／【a：うん／うん】「あー十二指腸潰瘍になった」とか思ってー【笑】／【a：うん】

- | | |
|---------|---|
| 8.2 a : | それで私にメールを打ったんよねー／ |
| 8.3 a : | こないだくれたメールの内容>分かってなかったかもー／<あのメールは、自分の病気が>十二指腸潰瘍かーい／胃潰瘍かもしれんってゆーことか／ |
| 8.3 b : | うん／ |

(談話資料D)

「bがaにメールを打った」という後件は、既にaにとっては既知の事実であった。その事実に対する理由が8.1のbの発話において明らかになったために、両者は後付けで順接の形に結ばれている。この「認め型」は、「で」の用法では見当たらなかったものであり、また、この事例8における「それで」は、単純に「で」には置き換えられない。なぜ、この用法は「それで」では認められ、「で」では認められなかったのであろうか。

まず、考えられるのが、添加と順接という用法上の違いである。「添加・のべたて型」などの添加の用法では、前件と後件との関係はあくまでも並立かつ対等である。一方、前件を根拠として後件でその帰結を述べる順接は、前件を根拠とするため、後件は前件に依存している。独立した発話を積み重ねる添加と比べると、順接は前件と後件との関係がより緊密である。二つの発話の間に因果関係をもたせるためには、前件を明確に指示することが必要となる。また、他の談話参加者にも、前件と後件とを明示しなければならない。そこで、指示詞の意味合いの強い「それ」を持つ「それで」を用いると、前件を指示してより際立たせることができる。そのために、「それ」を持たない「で」は、この用法では用いられにくいのであろう。

次に関係していると考えられるのが、連続した話題の有無と話者交替である。同じ順接でも「順接・のべたて型」では「で」が用いられる。これは、「順接・のべたて型」には、前件と後件との間に連続的に続く話題があることが理由として考えられる。【事例1】では、背景に「bが胃潰瘍になった当日の体験」とも言うべき共通する話題があり、「で」の前後の文脈も、その話題に沿って展開されている。また、同じ話者が続けて話しているために、繋がりも分かりやすい。一方、【事例8】では、当日の行動に沿ってbが話している最中、唐突に、「bがaにメールを打った」という過去の出来事が登場する。これは、それまで続いていた「bが胃潰瘍になった当日の体験」という話題とは異なるものである。また、「認め型」では、前件と後件とが異なる話者の発話であり、間に話者交替を挟むために、自分が何を前件としているのかが、他の談話参加者に分かりにくくなる。「認め型」は、連続した話題を持たないことや、間に話者交替を挟むことによって、前件と後件との関係が分かりにくくなるため、指示する機能の強い「それで」を用いることが必要となるのであろう。

「で」が「それで」の用法の中で、「認め型」を表現できないのは、以上のようなことが影響している。「それで」と「で」とは同じ接続詞の異形の関係であると思われるが、全

く同じものではない。日常的なだけでなくた場面の談話においては、「それで」も用いられるものの、「で」が優勢である。また、「で」は「それで」の用法の全てをカバーすることはできない。前件と後件との関係が重要となる「認め型」の接続をする場合は、前件を明確に指示する必要がある。ここでは「で」は使いにくいために、「それで」が用いられる。

5. まとめ

以上、談話資料をもとにして、「で」の用法を検討し、考察を加えてきた。その結果、次のことが明らかになった。

1. 「で」は「順接・のべたて型」「添加・のべたて型」「展開要求型」「話題展開型」「既出文脈言及型」「依頼切り出し型」「逆説」の7つの用法を持つ接続詞である。
2. 「で」と「それで」とは類似しているものの、日常のくだけた談話においては「で」の方が主に用いられる。また、用法上の異なりもある。「で」は添加する場合に用いられることが多く、前件を的確に指示する必要がある順接では、あまり用いられない。特に、「認め型」は「で」が持たず、「それで」が持つ用法である。

6. おわりに

今回は実際の談話資料を使って接続詞「で」を分析し、その用法と「それで」との関係について考察した。その結果、「で」の具体的な用法と「それで」との異同を示すことができた。ただし、用例の収集が、限られた年代の女性のみという、非常に限定的な範囲に限られたという問題点もあるために、これ以外の「で」の特徴が存在する可能性もある。質的・量的な側面からのさらなる調査が必要である。

注

(注1) 接続詞は、研究者によってどのように文法上で扱うかがいまだ一定しておらず、「接続詞」の他にも、副詞の一部として認め「接続副詞」と呼ぶ場合など、様々な捉え方がある。本論文は文法体系での位置付けについて触れることを目的としないので、仮に「接続詞」と統一して呼ぶこととする。また、今回扱うのはあくまでも文頭に立つ接続詞の「で」であり、「電車で行く」といったような、いわゆる格助詞の「で」とは異なることを強調しておく。

(注2) 「で」が接続詞のうちで口語的な側面が強いことについては、田中（1984）などにおいて触れられている。

(注3) 今回の資料は、事前に参加者に録音の許可を得た上で、参加者aに録音を依頼して採取を行った。

(注4) これらの用法の名称と個別例は、有賀(1993)、金(2000)において紹介されているものを参考にした。ただし、「既出文脈言及型」は、前掲の論文では「前出文脈言及型」となっているが、今回、特徴をより明確に示すために、「既出」という言葉に置き換えて使用した。

(注5) 事例の発話文で用いられている記号は、以下の動作を示す。

= : 続く発話が前の発話が終了してすぐに続けて行なわれたことを示す

/ : 若干のポーズがあったことを示す = : その発話が途中で終了したことを示す

(数字) : その秒だけ沈黙が行なわれたことを示す 【 】 : 相槌が行なわれたことを示す

|笑い| : その部分で発話者が笑ったことを示す [] : 括弧内で同時発話が行なわれたことを示す

< > : 発話の内容が分かりやすいように私に補った部分を示す

() : 雑音などにより、その部分を聞き取ることができなかったことを示す

(注6) 「既出文脈言及型」は、後に述べるように、前件を必ずしもその談話内に持つとは限らない。表1に挙げたように、その談話が開始される以前の発話を示す場合もある。それを踏まえ、用法を特定する手段として、「既出文脈言及型」の可能性があり、なおかつ前件が特定できない用例については、談話参加者に確認を取る作業を行なった。結果、前件とするべきものが確認できた場合は「既出文脈言及型」、そのような発話が無かった場合には「話題展開型」に分類した。

(注7) 「飛び石型」という表現は永野(1972)及び佐久間(1990)を参考にした。

(注8) 今回採取した用例の中では、「今度会った時にお土産を渡す」ということを予め伝えておいた二人が、当日会い、しばらく談話を行なった後に、先の文脈に接続する形で「で、これを差し上げようと…」と用いられたものが確認できた。ここでは、その談話を超えて、それ以前の共通する事象に接続して、談話を展開している。このように、その談話を超えて接続する場合もある。

参考文献

- 有賀千佳子 (1993) 「対話における接続詞の機能について ―「それで」の用法を手がかりに―」『日本語教育』79 pp.89-101
- ひけひろし (1986) 「接続詞「そこで」「それで」」『教育国語』86 pp.74-88
- 同 (1987) 「それで」「だから」「したがって」『教育国語』88 pp.46-59
- 金 善 美 (2000) 「対話における接続詞「それで」の用法」『岡大国文論稿』28 pp.13-23
- 永 野 賢 (1972) 『文章論詳説』朝倉書店
- 大石初太郎 (1954) 「日常談話の接続詞」『言語生活』36 pp.37-43
- 佐久間まゆみ (1990) 「接続表現(1)(2)」『ケーススタディ日本語の文章・談話』桜楓社
- 泉子・K・メイナード (1993) 『日英語対象研究シリーズ(2) 会話分析』くろしお出版
- 塩澤 和子 (1997) 「順接型接続詞の意味と用法(1) ―ダカラ・ソノ結果・従ッテ・スルト・ソコ デ・ソレデー」『文藝言語研究言語篇』31 pp.23-55

田中 章夫 (1984) 「接続詞の諸問題 ―その成立と機能―」『研究資料日本文法第4巻 修飾句独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院 pp.81-123
—やまもと・たかあき、本学大学院博士課程後期在学—